
バカとテストと召喚獣～俺とアキの日常～

影法師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜俺とアキの日常〜

【Nコード】

N8720W

【作者名】

影法師

【あらすじ】

主人公龍宮空とバカテストメンバーが繰り広げるとたばた原作沿い？なお話です。

俺と新学期とクラス分け（前書き）

初投稿です。皆さんに楽しんでもいただければ、幸いです

俺と新学期とクラス分け

この俺、龍宮空がこの文月学園に入学してから2度目の春がやってきた。

学園へと続く坂道を上っていると後ろから名前を呼ばれた。

「おい。空。待ってよー。」

「空君。待ってよー。」

「空よ、待つのは、そんなに急がなくても、まだ時間には余裕があるじゃろう。」

「空、早すぎるわよ。」

振り返ってみると、そこには、いつものメンバーである、吉井明久、藤堂花音^{とうどうかのん}、木下秀吉、木下優子がいた。

「おう、明久、花音、秀吉、優子、おはよう。いやー、今日振り分け試験の結果発表じゃん。なんか気が気でなくてさあー。」

「まあ、わからなくてもいいけど、ぼくも楽しみだし。」
と明久が答えると同時に、学校の正門に着いた。

「おはよう、龍宮、木下姉弟、藤堂、と・・・おい吉井、今日はどうした。何か悪いものでも、食べたのか。今日は早いじゃないか。」

「・・・西村先生、おはようございます。」

「ちよっと、西村先生、いくらなんでもそれはひどくないですか

？」

「気にするな吉井、今までのお前の行動を考えれば当然のことだ。つと、そうだお前たちの振り分け試験の結果通知だ。特に木下弟と吉井は今回頑張っていたな。正直お前たち二人は間違いなく、Fクラスだとおもっていたんだがな。」

「まあ僕も、空と花音に逢わなければたぶんそうなっていたと思いますよ。でも花音や空といっしょのクラスになりたかったですからね。」

「んむ、そのとおりなのじゃ、この5人で同じクラスになりたかったしの。」

そうこの二人は1年の時の成績は最低ランクであり、今回の振り分け試験のために俺と優子、花音で勉強を教えたのだ。そのため、二人の学力はうなぎのぼりに上がり、その結果、

「吉井、木下姉弟、藤堂、龍宮、お前たち5人は全員Aクラスだ。そのうえ、龍宮、お前は、Aクラスの代表、いわゆる学年主席だぞ。さすがだな、教師みんながびっくりしていたぞ、なぜ普通の学生が教師以上の点数をとれるのかとな。」

これについては、俺には答えを導き出す者というものがあり、問題を見ただけで答えやその計算方法までわかるというものであり、若干のチート能力が備わっているためであるが、それについては、今のところ俺の家族以外では、優子しか知らない。

なぜ優子が知っているかというと、俺は優子と幼馴染で恋人という関係であるからだ。必然的に弟である秀吉とも幼馴染ということになる。あと明久とは小学校からの付き合いであり、花音とはまだ

知りあつて1年ほどだが、去年入学式でお互いに一目ぼれし明久から告白して付き合うようになったらしく、それ以降仲良し5人組みとして行動するようになった。

「さあ、これでクラスもわかったことだし、さつさと教室に行くか。それじゃあ西村先生頑張つて下さい。失礼します。」

「」「失礼します、西村先生。」「」

「ありがとう、お前たちも頑張れよ。」

さて、今年も、学校生活を楽しもうかなつと！

「ああ、それと龍宮、学校内では、そのローラースケートは禁止だからな。」

「だから、これはローラースケートじゃなくて、A・Tエア・トレックだつて言つてるでしょ。世紀の大発明なんですよ。てか、さすがに学校内でははかないですよ。」

「それならいい。早く行け。」

という会話をして、俺は先に行った4人を追つてAクラスの教室へと向かった。

俺と新学期とクラス分け（後書き）

ありがとうございました

オリキャラ設定（前書き）

オリキャラの設定です。

オリキャラ設定

オリキャラ1

名前 たつみや 龍宮 そら 空

性別 男

身長 180センチ

体重 72キロ

容姿 母親似で髪色は銀色で西洋人風の顔つき。

瞳は右目が赤、左目が青のオッドアイで少々つり眼のため若干勝気な印象を受ける。

締まった体つきのため若干体重は大目だが本人いわく、

「普通じゃねえの？」

とのこと。

点数 総合科目では7000～9000点ほど、本気を出せば15000点前後になる。

得意科目は化学、古典、現国、世界史、日本史。この5教科では平均900点を取る。

部活 工学部（空の履いているA・Tは空の作品）

補足 日本人の父、イギリス人の母、弟の4人暮らし。

木下姉弟とは幼馴染であり、姉の優子とは恋人関係にある。

（両家の親公認）

また、吉井明久とも仲がよく、明久の私生活を改善し、秀吉とともにAクラス入りさせた功労者 の一人である。

ちなみに、A・Tでは「幻影の道」（シャドウ・ロード）を走り、ある程度の技は使える。

また、生まれつき「答えを導きだす者」（アンサーターカー）という能力を持っている。

召喚獣 メイン武器 太刀（任意で大きさを変更可能）

服装 青色の鎧（戦国バサラの伊達政宗の鎧のようなもの）

オリキャラ2

名前 とうとう 藤堂 かのん 花音

性別 女

身長 158センチ

容姿 黒い髪を肩まで伸ばし、それをポニーテールにしている。（明久が好きな髪型だから）

胸は限りなくEカップに近いDカップであり、瞳の色は黒色で、いわゆる「日本人形」のような 外見である。

点数 総合科目は4500点前後。

得意科目は、古典、現国、世界史、日本史、家庭科。

苦手科目は、数学と物理、英語。

部活 料理研究部

補足 日本人の両親とアメリカに留学中の姉がいる。

主人公たちとは、学園に入学してから知り合い、入学式の日
に明久に一目ぼれ。このとき明久も 花音に一目ぼれしており、
1年の1学期終業式の日明久から告白され、恋人関係になる。

しかし、このときには、すでに姫路、島田のフラグが立って
いたため、嫌われている。

明久と秀吉をAクラスに入れるために空と頑張っていたのも
この人である。

また明久との関係については、明久の姉である玲も含めた（
↑ここ重要）両家の人間すべてが許可 しており、結構イチャラ
ブしている。

料理研究会に所属しているせいか、料理についてはプロ級の
腕前であり将来は自分の店を持ちたいと考えている。

召喚獣 メイン武器 弓

服装 巫女服

オリキャラ設定（後書き）

以上、オリキャラの設定でした。
まだまだ、始めたばかりですが、温かく見守っていただけたら幸いです。

感想、ご意見待ってます。

俺とアキ達とAクラス（前書き）

いよいよ試験召喚戦争編スタートです。

俺とアキ達とAクラス

「すごいクラスだな、Aクラスって」

今俺たちはAクラスの教室前に来ている。

「ほんとだよな、これじゃ教室っていうより、一流のホテルの待合室みたいだと思うよ。」

「まったくだわ、吉井君の言う通りね。」

そう、なにがすごいって、勉強スペースは完全な個室、フリードリンクサーバーに、お菓子も食べ放題、また冷暖房完備で、大型ディスプレイ付きといったなんともぜいたくな設備なのだ。

「あり得ないのじゃ、これであの学費とは信じられんのじゃ。」

「ほんとですよね。」

花音と秀吉の言うように、この文月学園は試験校のため学費がかなり安い。

そのため、1年の最後に行われる振り分け試験の結果に応じた教室が与えられる成績累進式を取り入れている。

クラスはA〜Fまでの6段階に分けられAが最高ランクでFは最低ランクの教室になっている。

「・・・さつきFクラスを見てきたけど、あれはひどかった。」

「おおう、霧島。頼むから気配を消した状態で背後に立たないでくれ。」

この人は、霧島翔子と言い、俺がいなければ、間違いなくAクラス代表、つまり学年主席になっていたであろう人だ。まあ、俺にはアンサートーカーがあるから若干チート臭いが。

「でも代表、どれぐらいひどかったの？」

「・・・優子、このクラスの代表は私じゃなくて、龍宮だから。」

「あつ、ごめん。なんか霧島さんのことは、代表って呼ばないといけないような気がして・・・」

と優子がメタ発言しているが気にしない方向で。

「んで、霧島、どれくらいひどかったんだ？」

「・・・置に、座布団、ちゃぶ台だった。」

「・・・それは、ひどいね（な）（のじゃ）。」「・・・」

と話していると、

「皆さん、ホームルームを始めますので、席についてください。」
と学年主任の高橋洋子先生が言いながら教室に入ってきた。

高橋先生はクラスの全員が、席に着いたことを確認すると、

「私が今年一年このクラスを受け持つことになった高橋洋子です。
よろしく願います。」

と、挨拶をした。

それから、備品の確認をしたのちに、自己紹介をするように言われ、一人ずつ自己紹介をしていく。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。先に言うておくが、わしは男じゃからな今年一年よろしく頼むぞい。」

おつ、秀吉が自己紹介をしたな、男だと釘を刺すあたりもう間違われたくないみたいだな。

「姉の木下優子です。趣味は読書です。これから一年よろしく願います。」

優子か、やっぱりかわいいよな！。でも趣味の読書って・・・。
いや考えるのはやめておこう。

「えーっと、吉井明久です。本来なら僕がこんなところにいるのは場違いなんです、そこにいる龍宮空と花音のおかげでAクラスに入ることができました。今年一年よろしく願います。あと花音は僕の恋人なので手を出したやつは血祭りにあげますのであしからず。」

『あいつが、観察処分者だった奴か。そうは見えないけどなあ。』
今度は、明久か。まあ、確かに、去年の成績を知っていれば、ここに入れるわけがないよな。いやーしかし明久の成績を上げるのは、苦労したぜ。まったく。てか明久が観察処分者になったのには、理由があんだよ。

「藤堂花音です。趣味というか特技は料理です。料理研究部に所属しています。よろしく願いします。」

とっ、次は花音か。あいつの作る料理は確かにうまい。もはやプロ級だからな。最高だよ。

というように、順調に自己紹介を進めていくと、

『大ありじゃー!!!』

というでかい声が聞こえた。

「なんだったのでしょうか、今の声は？まあ、いいでしょう。それでは龍宮君、あなたが最後です。お願いします。」

おっ、おれの番か。

「了解つと。あークラス代表の龍宮空だ。龍宮でも空でも好きなように呼んでくれ。」

ここで一度話を区切り、真剣な表情になる。

「ところで、さきほど聞こえた声についてだが、おそらくFクラスだろう。あまりに設備がひどいから試験召喚戦争を仕掛けようとしているんだろう、たぶん最終的な目標はAクラスに。」

『なんだって！そんなことがあるというのか、龍宮君。』

「んっ、お前は確か、久保だったか？残念ながらあるんだよ、これが。Fクラスの代表は、坂本雄二だって話だからな。」

そう、この坂本雄二という男なかなかの曲者で知略に富んだ奴らしい。

「おそらく、振り分け試験で途中退席した、姫路瑞希もFクラスにいるから、勝てると思っっているんだろ。まあ、来たら返り討ちだな。とりあえず、Fクラスの出方次第では試召戦争になるから、全員準備だけは怠らないでくれ。」

と言い、自己紹介は終了した。さて、いつ頃、うちに仕掛けてくるかな？

俺とアキ達とAクラス（後書き）

はい、今回は自己紹介までとしました。

てか、秀吉をAクラスに入れたから対Cクラス戦のフラグが・・・

どうしようかなあ・・・

では、感想、ご意見待ってます。

俺と昼休みいつもの光景（前書き）

今回は、昼休みとFクラス対Dクラス戦中の光景です。
雪門さん感想ありがとうございました。

俺と昼休みいつもの光景

時間移って昼休み。

「おい、優子、秀吉、アキ、花音。飯食おうぜ、飯。」

「そうだね、食べようよ。」

俺が提案すると、アキがまず乗ってくる。

「そうじゃな、ちょうど昼休みじゃし、腹も減ってきたしの。」

「そうね、今日は空が当番だったわね、早く頂戴、空のお弁当美味しいから楽しみなの。」

「明久君、私も作ってきたんだけど、食べてくれるかな？」

なんと、花音とアキが手作り弁当を作りあう仲まで発展していたとは！全然気がつかなかった。

「ホントに！花音の料理超おいしいから大好きなんだよ！ありがとう花音！」

「そんな、大好きだなんて・・・」

おお・・・アキの一言で花音が真っ赤だ・・・アキは天然たらしだな・・・

「ほらよ、優子、秀吉。弁当だ。」

「ありがとう（なのじゃ）空。」

「「「「それじゃ、いただき」あつ、優子ここにいたんだ。」ます。「「「「」

んっ？誰だ、このタイミングで入ってきたのは、って・・・

「ん？なんだ、工藤じゃないか。」

「おつ、みんな勢ぞろいだね。僕も一緒に食べてもいい？」

「別に、構わないぞ、なあ、みんな？」

「「「「うん（うむ）。」「「「「」

「ありがとっ、じゃあ僕の席は、ここだね。」

といい、工藤は秀吉の隣に座る。

「くっ、工藤、隣に座るのはいいのじゃが、なぜそんなに近づい

ているのじゃ！もう少し離れてくれんかの？」

「え、優子の弟君は僕が近づくのは嫌なの？」

「いや、別にいやというわけではないのじゃが、……………恥ずかしいのじゃ（ボソツ）」

「なにいつてるのさ。じゃああの二組の行動はどうなるのさ？」

「いや、あの二組と一緒にしたらいけないじゃろ……………」

んっ？なんか秀吉と工藤が俺達のほうを向いてなんか言ってるな。まあ気にしないことにしよう。

ここで突然ですが俺達、正確には秀吉と工藤を除いた残り4人の状況について話しておこう。

俺とアキは、それぞれの恋人（この場合は、優子と花音）から、弁当を食べさせてもらっている。俗にいう「はい、あーん」という感じのやつだ。

「秀吉も工藤も弁当食べないのか？特に秀吉、今日の弁当は特別に力を入れて作ったんだぞ」

「いや、食べるぞい。いただきますなのじゃ。」

「じゃあ、僕も食べようかな。いただきますーす！」

ということで、みんなで昼飯を食べた。まあ、食べている間中周りからの視線が痛かったり、工藤が秀吉に「はい、あーん」ってして、秀吉が大変なことになったりとなかなか大変だったがな。

昼休みも終わり、午後の授業。昼休みが終わりすぐに、高橋先生が教室に来て、

「本日、午後からDクラスとFクラスが試召戦争をするので、午後からは自習になります。」

といていたので、ただいま絶賛自習中。

「ねえ、空、この問題が分からないんだけど。」

「んっ、どの問題だ？って、ああなるほどな。この問題は、ここをこうしてだな……………」

と自習中なので、優子が分からないところを教えている最中です。
「ねえ、空、僕たちも混ぜてもらっていいかな？」

とアキ達が入ってくる。

「別にいいぞ？こっちに来いよ。」

と結局みんなで勉強することに。

「ところで空は、今回のDクラス対Fクラスは、どっちが勝つと思う？」

「愚問だな、アキ。今回は間違いなくFクラスが勝つだろう。」

と俺が当然のことに言うと、優子が、

「なんで、空はそう思うの？普通に考えれば、Dクラスが勝ちそうだけど？」

「優子、俺が自己紹介のときに言ったことをよく思い出してみろ。」

「空の自己紹介・・・あつ、そういうことね。」

と、優子は俺の言いたいことがわかったようだ。

「どういうことなの、空、優子さん？」

「やれやれ、アキは相変わらずだな。俺は自己紹介のときこう言っただろ「振り分け試験を途中退席した姫路瑞希もFクラスにいる」ってな。だから坂本のことだ。今回は何とかして姫路に回復試験を受けさせて、姫路の点数で勝つつもりだろうな。」

「なるほどね、姫路さんなら霧島さんや花音に匹敵するほどの点数だから楽勝でしょうね。」

「まあそういうことだな、んでもう一個面白いことを言うと坂本はDクラスに勝っても設備の入れ替えをしないはずだ。たぶん次の戦争の時の布石のためにな。」

「次のための布石って？」

と言いながら、優子が首を傾げてきた。くそう、可愛いことしてくれるじゃねえか。

「たぶん、次はBクラスあたりに攻め込むだろうな、俺たちに試召戦争挑む時のために。」

「ええっ！まさかうちのクラスにまで攻めてくるの？」

「当たり前だろ。Fクラスの目的はうちのクラスの設備なんだから。」

なにを当たり前なことをつていう感じで答えると、みんな信じられないような顔でこっちを見ている。てか、みんなの間抜け面、マジ笑える……

「というわけだから、ちゃんと準備しといてくれって言っただよ。ちなみにそのときは一騎打ちを挑んでくるだろうから一応五対五で受けるつもりでいる。メンバーは俺、優子、アキ、花音、霧島だ。このメンバーには意味があつてな、まず俺はクラス代表だから確実に参加、んで優子には悪いが土屋の相手をしてもらう。」

「ちよっ、ちよつとまつてよ。土屋君つて確か保健体育が嘘みたいに高い人よね？そんな人になうはずがないでしょ。」

「大丈夫だ、俺が勝てる策を教えてやる。んで花音は島田、アキは姫路、霧島には坂本と闘ってもらう。んで霧島には、勝ったほうがあいての言うことをひとつ聞くつて条件を出せばいい。これを飲まなければ一騎打ちは受けないといつてな。という風に進めて、できればアキまでに決めてくれ。んで、霧島対坂本はエキシビジョンマッチそれでも相手が納得しなければ、俺対Fクラス全体で、勝てばもちろん設備は入れ替えるとも言えはいいだろ。それなら俺も楽しめるしな。」

と説明しておいた。

Dクラス対Fクラスの試召戦争がFクラスの勝利で終わったのはそれから30分後のことだった。

ちなみに戦後対談のことも予想通りで設備交換しなかったのとことだった。

早く、仕掛けてこないかな、その日が楽しみだ。

俺と昼休みといつもの光景（後書き）

はい、今回は昼休みと自習中のお話でした。

イチヤラブが書けない（泣）。しかも秀吉×愛子のフラグも立ったのかもよくわからない・・・

皆さん、こんな駄文ですが、よかったら読んでやってください。

感想やご意見待ってます

俺と戦争とCクラス（前書き）

いよいよCクラス登場！

主人公たちの運命はいかに？

俺と戦争とCクラス

Dクラス対Fクラスの試召戦争がFクラスの勝利で幕を閉じてから2日後今度はFクラスがBクラスに試召戦争を仕掛けということ
で学年中この話で持ちきりだった。

俺は特に気にすることでもない、というか、予想通り過ぎて拍子
抜けしてしまい、自分の席で小説を読んでいたのだが、

「ねえ、空。空はこの戦争どうなると読んでの？」

と優子が話しかけてきたため、一度読んでいた小説のページにしお
りを挟んで閉じ、優子のほうを向いて、一言、

「ん？そんなものFクラスの勝利に決まっているじゃないか。B
クラスが勝つなんて万が一にもないよ。むしろ今回の戦争でうちの
クラスに被害がないかが心配なんだよな。」

「それは、どういうことじゃ、FクラスとBクラスの戦争じゃの
になぜわたたちに被害が及ぶことになるのじゃ？」

「ん？よう、秀吉。そういえば、坂本雄二ってのはお前とアキの
共通の悪友だったよな、確か？」

「んむ。確かにその通りじゃ。しかし、それと今の話にどのよう
な繋がりがあるのじゃ？」

ああ、やっぱり、普通はわからないよな。しゃーない説明するか。

「秀吉、優子。お前たちはBクラスの代表がだれかは知っている
か？」

「「いいえ（知らぬのじゃ）」」

「Bクラスの代表はあの根本なんだよ。」

「「根本ですって（じゃと）」」

Bクラス代表の根本、本名根本恭二、こいつは目的のためなら手
段を選ばないことで有名なやつで、曰くカンニング常習犯、喧嘩に
刃物はデフォルト、球技大会で一服持ったなど様々な悪評を持って
いる奴だ。

「なるほどのう。しかしやはり話が見えてこんのじゃが。」

「あと、根本とCクラス代表の小山は付き合っているらしくてな。おそらくその関係を利用して、何かしらの作戦を立てるはずだ。たぶん試召戦争が始まってすぐにでも、協定を結ぶだろう、おそらく内容は『午後4時以降の試召戦争に関する一切の事柄を行うことを禁止する』という内容のな。んで、Cクラスが試召戦争の準備をしているというデマ情報が流れてきたら優子お前ならどうする？」

「難しいわね。でも私なら間違いなくCクラスと同盟を結びに行く・・・あなるほどね。」

「さすがは優子だな。そう同盟を結びにいくがそこには根本がいて、協定違反を理由に攻撃するだろうな。そしてそれを受けたFクラスはCクラスを敵とみなし何らかの対策を実行するだろう。」

そうこれが注意すべき点。そして俺が一番心配しているのが・・・

「そして、この対策に使われそうなのが、秀吉お前なんだよ。」

「なんじゃと？どういうことじゃ？」

「それはな、Cクラスの意識を他クラスに向けるときに、お前たちならどのクラスに向ける？」

「それは間違いなく、Cクラスより上位クラスに向けて時間を稼ぐでしょ（じゃろ）・・・？」

「そう、それで今回敵意を向けるのにふさわしいクラスはどこだよ？」

「Aクラスでしょ（じゃろ）」

「そのとおり、そして秀吉には優子という双子の姉がいる。それを利用して、坂本はCクラスをAクラスにけしかけるつもりなんだよ。」

「なるほど。」

「だから秀吉、坂本がお前に話しかけてきたら、何が何でも断れ、たぶん坂本はお前のコンプレックスである「女に見える」ということを利用してくるはずだ、「男らしい秀吉なら一度俺の頼みをきい

てくれたんだから断ったりしないよな」とか言いながらな。」

「んむ、わかったのじゃ。」

よし、これでたぶん何とかなつたはずだ。

そんなこんなでこの日は終了し、いつものメンバーに工藤を加えた6人で帰路についた。

翌日……

「秀吉、坂本からアプローチはあつたか？」

「んむ、あつたが断つたぞい。雄二は心底当てが外れはずれたようであつたがな。」

「よし、これでたぶん大丈夫なは「木下優子と、秀吉はいる？」ず・ん？」

Aクラスの誰でもない声がして、声のほうを見ると、そこにはCクラス代表の小山の姿があつた。

「わしらに何か用かの。」

と秀吉が、小山の前に立つと、小山は肩を震わせながら、

「あんたたちが木下優子と秀吉ね。よくも私たちをブタ呼ばわりしたわね！」

「な、何の事じゃ？わしらがそんなことをするはずなかるう。」

確かに秀吉達は俺と一緒に学校に来てからずっと一緒にいたからそんなことはできるはずがない。

「うるさいわよ。よくもよくも……」

駄目だな、こりゃ。まったく聞く耳持つてないな。

「私たちCクラスはAクラスに宣戦布告をします。叩き潰してあげるわ！」

と言ひ小山たちは去つて行つた。

「どうして？私たちは何もしていないのに……」

「たぶん、Fクラスだろう、偽情報を流したんだろうな。まあ、いい。」

今回は秀吉とさらには優子まで利用されてかなり頭にきてんだよ。

Cクラスなんざ叩き潰してやる！

「みんな聞いてくれ。俺たちはCクラスに宣戦布告された。しかしみんなに聞きたい。優子や秀吉が今Cクラス代表が言ったようなことをやると思うか？」

『あの二人がそんなことをするはずがない！』

『そうだ、そうだ』

と、クラスのあちこちから声が上がる。

「そのとおりだ。よって俺たちはこれからCクラスとの戦争に入る。今回は作戦も何も立てる必要がない。力と力の真っ向勝負で蹴散らしてやれ。」

『おおーーーー！！！！！！』

「「みんな、ありがとう（なのじゃ）」」

さあて、CクラスとFクラスの皆さん、俺を怒らせたこと後悔させてやるからな！（怒）

俺と戦争とCクラス（後書き）

さて、次回からいよいよCクラスとの戦争に入ります。

私が考え付かなかったためFクラスが行った挑発行為については省略させていただきます。

それでは、次回をお楽しみに！

感想、ご意見お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8720w/>

バカとテストと召喚獣～俺とアキの日常～

2011年10月9日15時45分発行